年下のオトコノコ

梅鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
年下のオトコノコ

【Ｎコード】
Ｎ８９７１Ｐ

【作者名】
梅鳥

【あらすじ】
サガフロンティア（１）ヒューズ×レッド…というより、ヒューズの自覚話。時間軸はレッド編終了後。
といっても、全く、色っぽい表現などありませぬ。
世にも珍しいヘタレなヒューズでございます。

アイツは、アイツは、カワイイ、年下のオトコノコ…

ＩＲＰＯは、このリージョン世界にとって唯一の正式公安機構――つまり警察である。

広いリージョン世界きっての腕利き捜査官である筈のヒューズは、一週間のリフレッシュ休暇後の久々の登庁早々喫茶室にしけこみ、なみなみと注がれたブラックコーヒーを飲みもしないで見詰めため息をついていた。

キャンベルの武器密造疑惑に関する捜査から、秘密結社ブラッククロスの壊滅…この大きな事件（ヤマ）が解決し、その功績により得たはずのリフレッシュ休暇が、休暇でない。

本当に、リフレッシュしようとして、思い切って出かけたバカンス専用のリージョンの照りつける太陽青い海、そして、ビキニの美女も…何ら、ヒューズの心を明るくさせはしなかった。

思い出すのは一人の青年――この俺をおっさん呼ばわりする無礼者。

でも、管理していた秘術『盾のカード』を差し出した時の、

「おっさん、ありがとう！」

純粋な笑顔の眩しさに、おっさん呼ばわりの不快は何処ぞなりへと家出して、ついぞ帰ってこない。

そして――ふとした時に見せる、達観したような瞳。

家族を理不尽な暴力で亡くした悲痛な光が、アイツをただのガキから一線を臥している。

ヒューズは滅入っていた。

なんで、よりによって、目の前の豊満で柔らかい肉体的な美女を

眼福としその愛を乞うどころか、固くて色気の全くないオトコノコばかり思い出すのか。
そんな状態で十分にバカンスを楽しめず、本当は一カ月ぐらい休暇をとってやるつもりが、たった、一週間で帰ってきてしまった。
そんな事をしても、意味がないのに……ヒューズは、遙か彼方にやっていた意識をコーヒーの前に戻す。
夢から覚めなければ。
何故なら、事件の解決した今、自分と彼の人生を繋ぐものがいともあっさり解れてしまったのだから……それにショックを受けた自分にショックを受けた。
盛大にため息をつく。
そんな時に限って、まだ、追いうちをかけるように喫茶室に惰性で流れるレトロ音楽の歌詞が、胸を抉る。

《アイツは、アイツは、カワイイ、年下のオトコノコ…》

なんで、アイツを思いだすんだよ！
「く……そっ！」
砂糖もミルクも入れていないのに、コップの中身をスプーンでぐるぐる掻き混ぜ、苦い苦いそれを一気に飲み干した。
コーヒーは、もう、ぬるい。目を覚まさないと…そう、思いつめているのが、自分でもわかって、男は、テーブルに突っ伏す。
本当に、俺はどうしたというのか――いや、それも解らぬほど者知らずな子供じゃない。認めたくないのだ。
さもありなん、よりによって……頭髪を掻き毟った時、
「意外と早い復帰ね。バカンスに出かけるんじゃなかったのかしら？」
顔を上げれば、ドールが、そのコードネーム通りの人形のような整った容貌の口元をほころばせて笑っている。
その美しさたるや、天上の女神のごとく。目も冴えんばかりだ―

――そう、いっそ、全て悪い夢として目を覚ましたい…！
ヒューズの心底の願いを知ってか知らずか、彼の女神は、不遜な男にこういった。
「あの子に会ってきたわ、元気そうよ」
それだけで、胸が焦げる……重症だ。
アイツは、突然のドールの訪問にも嬉しそうな笑顔で迎えたのに違いない。その眩しい笑顔で…
「クソガキなんてどうでもいい」
嘘だった。何を話したか気になって、ドールの眉の動き一つから汲み取ろうと必死になっている。
「ふふ」
いつもなら、鼻の下を伸ばして喜んでいただろう彼女の笑う吐息すら、今のヒューズには、居心地悪い事この上ないものであった。
「休学していた大学にまた通い始めたって…」
ああ、耳がダンボになる自分が呪わしい。
重大事件の捜査報告すらこんなに真剣に聞いたことがないと言える位。
そう思ったせいか、ドールの声が会議中のそれに聞こえてきて、心に平常が戻ってきたというのに……次の瞬間。
「大学に彼女とかいないの？　と聞いたら、赤い顔して可愛かったわ」
とんでもない、爆弾を落としてくれる。
これは、確信的にしている心理かく乱作戦か！？
「ガキをからかうんじゃない…」
その実、からかわれているのは、こっちだとわかっていたのに…ぐらぐら揺れるヒューズに、ドールは追い討ちをかけた。
「素直で真っ直ぐな子ね。解っていたけど、素敵だわ」
「やめろ！　ガキなんかにちょっかいかけるな…！」
鋭くなる口調は、ちょっとした犯罪者なら裸足で逃げ出す程の威力を放つ。

が、勿論、そんなものでどうにかするほどＩＲＰＯの捜査官はやわでない。
「どうして？　私も彼もフリーよ、何ら問題ないわ」
数学の公式でも唱えるかのような平坦な口調の女性の表情は、コードネーム通り表情の読ませない精巧な人形。こちらを何らかの意図に嵌め込もうとしているのだ。解っている……しかし。
「レッドはお前が思っているほど、強いだけじゃない！」
どうしても、我慢がならず、声を迸らせる。
「そうね。そういうところも、素敵と思っているのよ？　それに、事件が終わった今、あなたには関係ない筈よ？」
息が詰まる。その通りだ。
事件の解決と共に、驚く程希薄になった、自分と彼の縁。
細く細く、遠く――――繋がる糸の手応えの無きを恐れ、引き寄せる事すらできない。
もう、関係のない彼がドールとくっつこうが棄てられようが関係ない……のに。
おっさんおっさんと、憎まれ口ひとつ忘れられない。
そんな俺にトドメを穿ったのは、思わぬ伏兵。
「あの子、遠い所へ引越しするそうよ」
まだ、辛うじて繋がっていたレッドとの糸が切れる。
事件が解決し、平穏なる生活を取り戻した彼の引越し先を調べる権限など誰にもない。
だが、こんな中途半端な事で、彼とは永の別れになるなど受け入れられる訳がない……切れた方の糸を、いつまでも未練がましく持っている自分など無様の他ならない。
そんなぐらいなら――――――
「そうか…」
「引越しは、明日ですって」
クーロン経由を考えれば、迷っている時間などなかった。
ヒューズは、自らの中の頑なな何かごと、それをバチリと引き千

切り、自分のＩＤカードをドールに投げ渡す。
認めてしまえば、気分は爽快だった――――走れ、大事件だ！
「俺は、絶賛バカンス中！」
一路、シュライクへ……バカンスはこれから！
そうだ、キレたのならば、新しく掛けなおせば、いい。古い糸には、用などない。
「了解」
ドールは、早速端末からデータバンクにアクセスし、ヒューズ登庁のデータを消しにかかった。
端末を弄くったついでに、その場で報告書の作成を始める。
お供は勿論、ヒューズが飲んでいたのと同じブラックコーヒー。
それは、彼の思いがけない恋の苦さにぴったりだ。

職員がそれぞれの役目をこなしに各々の場所に散れば、喫茶室はドールの個人オフィスの様相を呈する。
そんな時分、彼女の隣の席にわざわざ腰掛ける青年がいた。同僚のレンである。
「見事なお手前で」
彼は、先ほどのヒューズの剣幕を思い返しつつ、笑いかけた。
同僚兼先輩の異変をどこかしら察し、見守っていたのだろう。
「これが、被疑者から一番大事な人間を聞きつける誘導尋問法よ」
「覚えておくよ」
ドールは口元だけを笑みの形に緩め、言った。
「私は『あの子』が『レッド』だなんて一言も言っていないのにね…」
レンは、耐えられないと、大爆笑する。
「あの『クレイジーヒューズ』をここまで掻き乱すなんて、大物だな…レッド君！」
「ＩＲＰＯにスカウトするかしら？」
「ヒューズの天敵として？」

ギャハハ！　と、今ここに来たコットンを爆笑の渦に巻き込む。
だが、ドールは内心自らの冗談を悪くはないと思っていた。
レッドはとても強いが、強いだけじゃないところこそが、正義の番人に相応しい。
そして――ともすれば自らの命すらブチ切りそうな、ヒューズの安全回路としても。
「キューキュー！」
「…・……――・…」
いつの間にやら更にメンバーに加わっていたラビットが、コットンと機械語とモンスター語を交えて会話をし、頷きあっていた。
「マジかよ…」
レッド、恐ろしい子…！　と、恐れすら滲ませ出したレンへ、気配なく隣に座るサイレンスが黙って頷く。
しかし、真の恐怖は、まだこれから。
「さて、この大きな借りを、ヒューズにはどうやって返して貰おうかしらね」
人形の冷たい笑みに、残りの腕利き捜査官たちが、命の危険を感じたという……。

「久しぶりだな、会いたかったぜ！」
――シュライクの発着所に辿り着いたヒューズに、笑顔のレッドが先制パンチをくれる。
何ら含みもない純粋なセリフなのに、いきなり心臓に大ダメージだ。
加えて、上る心拍に伴う血流が、ヒューズの頭の芯をふわふわとさせる。
「休みにわざわざ悪ぃな、引越しを手伝ってくれるんだって？」
「へっ？」
思わず間抜けな返事をしたヒューズに、レッドは訝しげに眉根を

寄せる。
「ドールから話を聞いてないのか？」
「そういうことか」
……やられた。やっぱりな。
レッドの表情が一層曇った。キレるか？とでも心配しているのだろう。
「で、何処に引っ越すんだ？リージョンシップの手続きとかは？」
「いや？シュライクからはでないぜ？」
「は…？」
「同じシュライクでも、オレと妹の学校が近い遠方へ引っ越すんだ」
ここにきてヒューズが幾重にも騙されたと悟ったのだろう。様子を窺うように見つめてくる。
「くそっ！ドールの奴！」
思い切り空の彼方へ振り仰いで毒づくも――彼女も彼女なりに、らしくないヒューズに気を利かせてくれたには、違いない…。
「……で、俺は何をしたらいいんだ？」
空から戻ってきたヒューズの、意外と穏やかな視線に、いつキレるかと緊張していたレッドは完全に不意をつかれ、色んな意味でドキリと驚いた。
「あ、ああ…とりあえず、大き目の家具を運ぶのを手伝って欲しい…」
「へいへい」
ちょっとレトロな感じのレンタルトラックに促され、わざと外股気味で歩きながら、ヒューズは嘆息する。
「おっさん、怒るなよ…うちの母さんの手料理は美味いから、さ」
共にブラッククロスを追っていた時と何ら変わらない、公然の秘密のヒーローの、ごく日常の姿。
事件とは違うスリル――――どうやって、共に旅する仲間以上に近くなろう？
「本当だろうな？」

「もちろん！」
あからさまにホッとしたレッドの笑みに、肩を揺らして笑う。
……本当、参った。本気で、参っている。コイツに。
黙って運転席に着けば、また変な顔をした。
「何か変だぜ…上機嫌だな。さては、バカンス先とやらで見つけた可愛いコでも思い出したんか？」
果たしてヒューズは、手元でエンジンをかけながら、助手席に座ったレッドに首を巡らせ目を細めた。
「ああ、そうだな」
―――カワイイ、年下のオトコノコを。
思いの外深い男の笑みに、レッドは背筋が伸びるほどビックリしてから、しかめ面。
何か、面白くない。
そんなイイ相手がいるなら無理してこっちに来なくても…いや、そんな話を聞かされてしまったら、あのおっさんがオレの事なんて忘れ去り、あんな笑みを可愛いコにだけ向けてイチャイチャするのを想像してしまって、落ち着かない。
「おい、素晴らしい事にカーナビひとつないようだが？」
レッドのもやもやは、不意にかけられたヒューズの感嘆の声で何処かへ行った。
「ああ、タダで借りたんだ…俺が案内するから、いいだろ？」
ヒューズは口笛を吹いた。早速、ドライブデートか？
「とりあえず、Ｒ－３１０へ行ってくれ」
「了解。こりゃ、長い旅路になりそうだ」
それでは、精々、過程を楽しむ事としよう。
このロマンもクソもない引越し行で、いかに、自分の心の中でデート要素を盛り込むかという世にも詰まらん妄想を交えるのも、乙というものだ。
「出発ー♪」
そんなヒューズの内情を知りようもないレッドが、まずは前方を

指差し出発のときの声を上げる。
「アイアイサー…」
まだまだ人生楽しむ気満々のガキの指図に従って、ヒューズは上機嫌でアクセルを踏んだ。
人生は、解らないものである。
このクソガキがカワイイと思える日が来るぐらい、波乱に満ちている———上等じゃないか！

そんなつもりはなかったのに、思わぬ情感が齎した、何もかもが真新しくなるそれぞれの旅立ち。
その第一歩は、今日この日だった。

「しかも、壊れるかよ、フツー！　どんなポンコツだよ！」
「うるせー！！」
「おい、レッド直るんだろうな？　お前、機関士だろ！？」
「リージョンシップとトラックを一緒にするなよ！」
よりによって、メインストリートのど真ん中でエンストを起こし立ち往生するトラックを蹴りながら、往来でギャーギャー喧嘩する男二人に恐怖した一般庶民が、パトロールを呼ぶのは当然のなりゆきで。
呼ばれたパトロールが、哀れ、クレイジーと鳴り響く中央のパトロールに八つ当たりの恫喝を受け、竦み上がるのは、閑話休題。

端からみれば、喜劇間違いなしのこの話……今日のところはこれにて終了。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8971p/

年下のオトコノコ

2011年1月2日22時40分発行